

斑岩、石英閃緑岩及び閃緑斑岩の分布と一致するものが多いことから、斑岩銅鉍化作用を表していると考えられる。

第5主成分は、Agの固有ベクトル値が高く、主成分得点の高得点域は石英斑岩及びカマローネス沢流域の石英脈の分布と一致するものが多いことから、斑岩銅鉍化作用とそれに引き続く浅熱水型鉍化作用を表していると考えられる。

第6主成分は、Au、Moの固有ベクトル値が高く、主成分得点の高得点域は花崗岩質岩の分布及びカマローネス沢流域の銅の鉍微分布と一致するものが多いことから、斑岩銅鉍化作用を表していると考えられる。

## 2-9 パチカ地域

本地域の地質図をFig. 2-2-45に、模式地質柱状図を Fig. 2-2-46に、鉍微位置図をFig. 2-2-47に、変質鉍物分布図をFig. 2-2-48に、岩石地化学異常分布図をFig. 2-2-49にそれぞれ示した。

本地域の地質は、下部白亜系、第三系、第四系及び貫入岩類からなる。

下部白亜系は安山岩質の溶岩・小岩脈及び火砕岩からなり、貫入岩類に貫かれる。この貫入岩類は、花崗閃緑岩及び閃緑岩からなり、貫入年代は従来地の地質図に従い白亜紀とした。下部白亜系及び上記貫入岩類は第三系により不整合に覆われる。

第三系は、古第三系漸新統～新第三系中新統の玄武岩・礫岩及び中新統～鮮新統のイグニンプライト(流紋岩質溶結凝灰岩・軽石凝灰岩)からなる。

第四系は沖積層及び崖錐堆積物からなる。

本地区の下部白亜系にはプロピライト化変質が普通に認められ、局部的なセリサイト化、珪化、黄鉄鉍鉍染及び重傷石・石英・褐鉄鉍再脈も認められる。また、貫入岩類もプロピライト化変質を受けているが、鉍化は認められない。

中新統～鮮新統のイグニンプライト中には変質・鉍化は認められないが、調査地域北西部(モチャ地区南西方)の同岩分布域でボーリング探鉍が実施されている。

岩石地化学異常として、Au-(Cu)-Zn-As-Hg異常が検出された。

空中磁気の間接強度帯、中波長低異常域周縁部及び短波長高異常部の重なる付近には、白亜系貫入岩類が分布する。

## 2-10 チュスミサ地域

本地域の地質図をFig. 2-2-50に、模式地質柱状図をFig. 2-2-51に、鉍微位置図をFig. 2-2-52に、変質鉍物分布図をFig. 2-2-53に、岩石地化学異常分布図をFig. 2-2-54にそれぞれ示した。

本地域の地質は、下部白亜系、中～上部第三系、上部第三系・第四系及び第四系からなる。

下部白亜系は泥岩・凝灰質砂岩・凝灰質礫岩からなる下位層と、玄武岩質～デイサイト質の溶岩・火砕岩からなり、貫入岩類に貫かれる。この貫入岩類は、花崗閃緑岩、閃緑岩、花

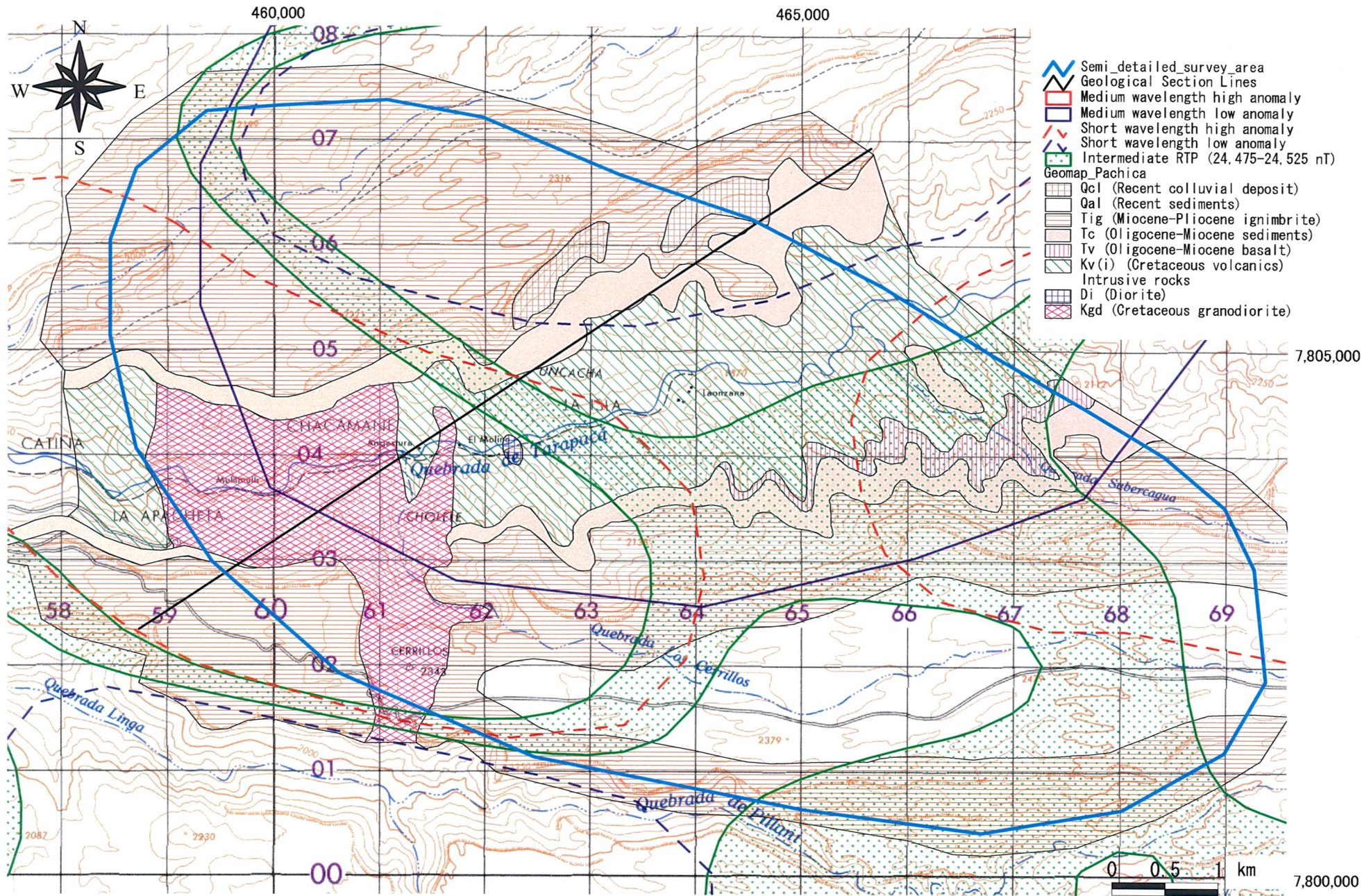


Fig. 2-2-45 Geological Map of the Pachica Area